

日本の知恵、
プラスチックの知恵

炎が鍛えた模様

「焼を入れる」とは、本来は刀鍛冶が鉄を鍛える様を表現した言葉ですが、まさに杉板を炎で炙って、やま活まを入れたものが焼杉板。木造の日本家屋の扉や外壁などに使われている、伝統的な加工技術のひとつです。

昔ながらの手焼きで作る方法は、3枚組み合わせさせて煙突のように立てて筒状にした内側に、下から火をつけて炎で焼きます。直後に水槽などに入れて急速に冷まし鍛えて完成。焼くことで杉板の表面が炭化し、雨風や紫外線などからも保護されて耐候性、耐久性が増し、60年を超える寿命を持つものもあるそうです。

この焼杉板のように、大切な命を預かる包装を具体的な形にしたのが、住友ベークライトの医薬品包装用多層シート。人の安心・安全を守るやさしいフィルム・シートです。



医薬品包装用多層シート
「スマライト®VSL」シリーズ

焼杉板

